

# マヤコフスキー『ミステリヤ・ブッフ』をめぐって

楯岡求美  
(神戸大学国際文化学研究所)

## 『ミステリヤ・ブッフ』の特徴

現在進行形で現実化した革命を本格的に取り上げた初めての戯曲／上演 (1918)  
当時の〈現在=いま・ここ〉が取り上げられていることに特徴がある。  
聖なるものの喜劇化 (格下げ) ・タブーの超克 ⇒ 天地がひっくり返るほどの衝撃。  
※『ユビュ王』『ファッツァー』

## 1. 基本モチーフ

### 1) ノアの方舟

地上の退廃に神が怒り、洪水を起こした。  
ノアは地上のあらゆる種のつがいを方舟に乗せ、種の保存を図る。  
40日40夜洪水が続いた後、ノアの放した鳥 (鳩) がオリーブの葉をくわえて戻る。  
方舟はアララト山 (現トルコ) に漂着する。  
新たな世界の出発に際し、神は「埋めよ増やせよ地に満ちよ」と祝福した。

革命を洪水に例える比喻は同時代に共通して見られる。  
(洪水が多発したペテルブルグの地理的背景もあるか)

マルクス主義革命+世紀末から引きずっていた終末思想 (キリスト教)  
原始共産主義と原始キリスト教共同体の類似性

### 2) ポスト洪水：歴史の振り返り

天地創造 — 中世キリスト教 — 王権 (封建制) — 共和制 (フランス革命) — 社会主義革命  
「はじめのうちは、何もかも単純でした。昼があれば夜がある。その繰り返しですね。ただ、夕焼けと朝焼けが異様に赤く、天と地の境を区切っていた。それから法律だ、観念だ、信仰だといろいろ面倒なことがあって、都会の花崗岩の塊や……」

※問題 (飢え) は解決していない：「これからどうするのか？」  
⇔ 現実のソ連：革命の無謬性

### 3) 『ねずみの嫁入り』もしくは『青い鳥』的円環構造

元の場所こそ、ユートピア (Nowhere) となりうる。(螺旋)  
「道具と手と手を取り合って作っていこう」→ 結果はまだわからない。  
聖書であるとともにおとぎ噺 (聖書自体、おとぎ噺?)

※聖書の解体、というより書き直し

## 2. 演劇の〈現在〉

1) 俳優と観客が時空間を共有する「いま、ここで」しか上演できないが、  
基本的には「過去の、どこか別の場所」で起きた物語の再現 (フィクション)。  
⇒基本的には再演可能な物語。  
俳優は役を演じる：素の「私」は舞台に出現しない。

⇔ ダンス：〈いま、ここで、私〉が可能  
大道芸・サーカス：〈いま、ここで〉  
映画：記録された過去／非現在

2) 物語 (history)がある。

＝世界観／神話：仕組みの分析 ≠ 起承転結の事件

＝過去から現在を通して未来へ

3) 場 (時空間) の共有

見る一見られる (俳優も観客も相互に見られる) インターラクティブ性

※『悲劇ヴァラジーミル・マヤコフスキー』エピローグ

「あなたがたのために書いた」

<私>の物語 ⇒ <私たち>/<みんな>の物語

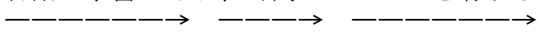
4) パフォーマンス：そこにある身体性 = 現在というドキュメンタリー

物語のフィクション性 (<いつか・どこか>の記録) と

パフォーマンスのドキュメンタリー性 (<いま・ここ>で目撃する) の二重性。

5) <いま>を表現する試み

物語は宇宙であり、時間のベクトルを有する



来し方

現在

行く末

(方向性)

3. ファルス (笑劇) に「翻訳」された「創世記」

1) この世はバカバカしい道化芝居である

ミステリヤ (聖書) をブッフ (笑劇) で上演。

人間 (歴史)、悪魔、神をドタバタ喜劇で解釈、格下げ、排除。

道化芝居はすべての価値を転倒させる。＝虚偽の剥ぎ取り／奪冠

道化：社会を異化する批評性、タブーの超越 (規範外)・・・ツッコミ

2) 過去を振り返り、過去の権威 (宗教も世俗権力も) をことごとく相対化

3) 個人が屹立すること (支配関係からの解放) は孤立ではなく 仲間がいる こと

＝理想化されたアーティスト (技能者) 集団が世界をアート化する。

＝クリエイター (創造主)

4) 『悲劇マヤコフスキー』の  
神としての「私」 (マヤコフスキー)

⇔

ザミヤーチン『われら』  
集中管理：同列化、均質化

↓  
私たちの相互信頼と責任  
(悪のない世界)

↓  
逸脱への不信  
(善のない世界)

いずれもファジーさに欠ける

5) ブッフの笑いと突っ込み

ノリ・ツッコミ／わざと間違ふ

選択肢の提示：曖昧さや余裕、緩和

検証：緊張